

**主 題：滑らかな人生を生きる**  
**聖書箇所：箴言 3章5－6節**

2時46分18秒、ある人たちにとってこの時間は忘れることのできない時間だろうと思います。3月11日、この日付は私たち日本人にとって忘れることのできない日付となったことでしょう。今日、昨年起こった東日本大震災から丁度一年が経ちました。東日本を襲った巨大な地震と、その後起こった大きな津波は1万6千人近い人たちのいのちを奪い、今でも3,200人近い人たちの行方が分らないままです。2万7千人の人たちが負傷し、今も3万2千人近い人たちが避難生活を強いられています。私の友人の東北地方で牧会をしている一人の牧師は、今日のことを思ってこんなことを言っていました。「この日を考えると、そこにある苦しみの思いや、恐れや、また、怒りの感情が複雑に絡み合って、私の心は痛む。」と。一年が経ちましたが、多くの人たちにとって今年のこの日に起こった出来事は、余りにも鮮明に記憶に残っているが故に、まるで昨日の出来事のように感じておられるでしょう。私たちが様々な困難を私たちの人生の中に感じる時に、経験する時に、それが例え大きな地震であったとしても、私たちの人生に起こって来るありとあらゆる私たちの心を揺り動かす出来事であったとしても、私たちの心は痛みや恐れや怒りや不安に満たされてしまいます。私たちはそんな時に、神に逃れることができることを知っています。私たちはそんな時に、神が私たちの避け所として私たちを支えてくださること、守ってくださることを知っています。私たちは神が巖であることを知っているが故に、神に信頼ができるのだということを知っているはずです。

けれども同時に、私たちはそのような私たちの心を揺るがす出来事が起こるたびに、この神に信頼することができるという真理に慰めを見出すことが困難であることを経験します。私たちは本当に神を信頼することができるのだろうか、そんな疑問を心に抱くことがあるからです。皆さんはどうですか？私たちは本当に神に信頼することができるのでしょうか？いろんなこ難しいこと、いやなこと、問題が私たちの前に山積みされていく時に、私たちは本当に神を信頼することができるのでしょうか？私たちの人生が余りにも苦しい時に、私たちは本当に神に頼って乗り越えていくことができるのでしょうか？私たちはみな、それが正しい選択であることを知っています。クリスチャンである皆さんは、そのようにして神に信頼すべきだということを知ってはいます。けれども、もし、私たちが胸に手を当てて正直に自分の心に問いかけた時に、私たちはきっと「それは分かっているけれど、実践することはものすごく難しい」と言っている自分に気付くはずです。私たちは困難に出会う時に、神に対する疑問を抱きます。私たちは神に対して憤りを覚えることがあり、神に対する信頼を失い、そして、神に対する希望を失います。

もし、皆さんが私のような者であれば、皆さんもきっと、どのようにして神が信頼できる方だという真実にしがみついていることができるのかを思い悩むことが多くあるだろうと思います。だから、私たちは神に向かって叫ぶのです。「この困難の中で、どのようにしてあなたに信頼して生きていくことができるのか分からない。」と。私たちは神に信頼することを知っていると知っています。その方法が分かっていると知っているかもしれませんが、けれども、現実を見る時に、本当は神に信頼することがどのようなことなのか、いったい、それがどのようにして私たちの人生を助けるものなのかということを知らずにいるのかもしれませんが。

確かに、聖書は私たちに命じます。「神様に信頼しなさい。神様に拠り頼みなさい。」と。そして、私たちはみな、それがすばらしいことだと心から言うでしょう。神に信頼することはすばらしいことです。正しいことです。信頼すべきことです。けれども、私たちはしっかりとこのことを覚えておかなければいけないのです。「なぜ、神に信頼することが良いのか？」、「実際に、神に信頼するとはどういうことなのか？」。

今朝、皆さんといっしょに、箴言の中でも最も愛されていると言っても過言ではない、きっと皆さんがすでに暗唱されていて、皆さんにとって親しみ深い箇所を見ていきます。箴言3章5,6節です。そこで、私たちはソロモンを通して、神に信頼をすることはいったいどういうことなのか、そして、なぜ神に信頼することが良いことなのかを考えていきます。もし、ここにいらっしゃる皆さんが、まだ神を信頼することを知らないなら、その必要を分かっているなら、今日ここで皆さんとともに見ていくこの箇所が、神に信頼することがどれほどすばらしいことなのかを教えるものとなることを私は心から祈っています。苦しみの中にある皆さんに希望が与えられることを私は心から願っています。もし、皆さん

が神に信頼することを知っていると言うなら、益々このソロモンのことばを通して、皆さんの心が燃え上がり、神を喜び、神に信頼し、神を私たちの心の支えとして生きていくことが出来るようになることを何よりも願っています。神に信頼することがいったいどういうことなのか、なぜ、それが良いことなのか、そのことを知って、どのような中であつてもどのような状況の中であつても、私たちは神に対する信頼を持って歩いていくことができるように、ごいっしょにソロモンのことばを見ていきましょう。

### 箴言3章5－6節

「3:5 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

:6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」

私たちは教会の中であつて、クリスチャン同士の間で、聞こえは良いけれども意味がよく分からないことばをたくさん使います。そんなことはありませんか？例えば「神様の栄光のために生きる」ということばは、私がいつも挙げるそのようなことばの代表です。なぜなら「神の栄光のために生きましょう。」と言っている人たちに、それは具体的にどう意味ですかと問うと、多くの方々が答えに困るのです。なぜなら、抽象的過ぎて具体的な意味が分からないからです。多分「神様に信頼しましょう」ということばもその中に入っているのではないかと思います。皆さん、使ったことありませんか？「神様に信頼したほうがいいです。神様を信頼しましょう。神様を信頼することはすばらしいことです。」と、私も言うし、いろんな所で聞きます。でも、いったいそれがどのような意味を持っているのでしょうか？神に信頼するとは具体的にどういうことなのでしょう？いろんな角度からこのことを話すことができますが、ソロモンは私たちに「神様に信頼する」ということがいったいどういう意味なのかを、三つの事柄をもってこの箇所を説明してくれています。ですから、まず最初に、ソロモンが言うその三つの事柄を注意深く見て、神に信頼を置くということはどのような意味を持っているのかを考えてみましょう。

#### ☆滑らかな人生を生きるために

#### A. 神を信頼するとはどういうことか？

##### 1. 神に対して完全な確信を持つ 5 a 節

5節に「心を尽くして主に拠り頼め。」、ソロモンは私たちにこう言います。「神様を信頼するということは、私たちが神に対して完全な確信を持つことである。」と。ここで「拠り頼む」と訳されているこの動詞はヘブライ語で「信頼する」という意味を持っている単語の動詞です。このことばの面白い所、興味深い所は、ヘブライ語の聖書をギリシャ語訳にした70人訳聖書では、この「信頼する」と訳すべきことばが、実は、「常に望む、希望を持つ、または、待ち望む」などという意味で訳されています。つまり、このことばが伝えようとしている、強調しているポイントとは、あるヘブライ語の辞書はこのように説明します。「それは私たちが啓示に対して、神のみことばに対して、知識的に、または意志的に応答することではなく、むしろ、私たちが神にあって安心を覚え、安全を感じる、その状態のことを言い表わしている。」と。つまり、別の言い方をすると、これは現在においても、未来においても、神に対する確かな期待を持っているということです。

ある牧師はこのことをこのように説明しました。「皆さんが自分の現在の状況を見て、もしくは、未来に起こるかもしれない事柄を考えて、皆さんは根本的に「私は大丈夫だ」と思っていますか？」と。もし、その答えが「大丈夫です」というものであるなら、皆さんはこのソロモンが言っている主に信頼するということをしていると言うのです。こういうことです。私たちが現在抱えている様々な事柄を理解するとき、未来に起こるかもしれないいろんな事柄を思う時に、神はすばらしい方で、神は愛ある方で正しい方で、私たちに對して最善を成す方であるということを知っているが故に、今もこれから先も基本的に私が思い悩む必要は一切ない、すべては万全であると言っているのです。

私たちは「神様は信頼することができる方である」と言っています。例え、周りの状況、外面的な状況がどのようなものであつたとしても、私たちは神がすばらしい正しい、確かな良い方であることを知っているが故に、私たちは「大丈夫だ」と言えるのです。例え、周りの状況が「そんなことはない！」と私たちにどれだけ訴えたとしても、私たちは「いや、神様は良い方だから大丈夫です。」と言って、完全な確信を主に持つこと、希望を持つことができるのです。前を見て待ち望むことができるのです。未来を見上げて、そこには「良いことしか待っていないのだ」という確信を持つことができるのです。なぜですか？神が私たちを愛してくださっているから、私たちが神の家族として受け入れられているとするならば、神と関係が改善されて神のものとしてされているならば、神は常に私たちに對して良いことを成す方であることを私たちは知っているからです。

詩篇23篇を見てください。皆さんがよくご存じの箇所です。23篇4節でダビデはこのように歌いました。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあつても、私はわざわざいを恐れませぬ。」と。なぜですか？「あ

あなたが私とともにおられますから。…」です。6節にもこのように記されています。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」、私たちはダビデがこの詩篇23篇を書いたときに、実際にどのような状況に置かれていたのかを具体的に知ることはできません。けれども、この中にも敵のことが出て来ます。敵に追われている姿が記されています。また、私たちはダビデの生涯が、そのような困難に満ちた人生であったことを知っています。サウル王や息子のアブシャロムは、彼を追い求めて彼を死に至らしめようと努めていたのです。そんな中であって、なぜダビデは「たとえ私が死の陰の谷を歩むとも、災いを恐れることはありません。」と言えるのですか？なぜ、そんな中であって「私の生涯の、いのちの日の限り、いつくしみと恵みとが私を追って来るでしょう。」と言えるのでしょうか？

ダビデはよく分かっていたのです。彼が信じている神がどんな方なのかを。ダビデはこの詩篇の最初の所で「主は私の羊飼い」と言っています。ダビデは神がどんな方かをよく分かっていたのです。ダビデは神がどのように彼に接してくれるのかをよく分かっていたのです。ダビデはこの神が自分を愛して止まない羊飼いであることを知っているが故に、どのような状況の中にあっても揺らぐことのない確信を持ち続けたのです。なぜなら、神はダビデに対して平安を与え、ダビデを回復し、ダビデを導き、守り、完成へと導いてくださる、受け入れてくださる羊飼いであったからです。

皆さんはこのように皆さんの神のことを知っていますか？皆さんはご自分の神がどんな方かをよくご存じですか？この方は全世界を造られた創造主なる方です。この方はすべてのことを統べ治めている主権者である王です。この方の知恵は測り知ることができず、この方の力はだれも逆らうことができない程偉大なものです。この方は良い方で、愛に溢れる方で、恵み深い方であり、あわれみ深い方です。出エジプト記34：6にはこのように記されています。「主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、」と。皆さんは、この方が私たちを見捨てる方だと思いますか？神はご自分で「わたしはあなたを見捨てない」とおっしゃったのです。「見捨てない」と言われたこの方が私たちを見捨てると思いますか？皆さんは私たちの生涯に最も必要であった救いを、ご自分の御子を惜しむことをせずにお与えになられたこの方が、今も私たちに関心を払わず、私たちに最善を成してくださらない方になったのだと思いますか？それとも、この方は今もなお御子を惜しむことなく与えてくださったが故に、今も続けて私たちに最高のものを、最善のものを備え続けてくださる方であると、そのように思っていますか？

ソロモンはここで、「心を尽くして主に抛り頼め。」と言います。単に、私たちが完全に神に確信を抱くだけでなく、それがどのように為されるべきなのか？「私たちの心を尽くしてそれをしなければいけない」と言うのです。「心」は私たちの作戦司令室です。私たちの思いも感情も意志も司る、私たちが支配する場所です。ソロモンが言っていることは「私たちの全身全霊をもって、私たちのすべてをもって、この神に対する完全な確信を持ちなさい。」ということです。それが神を信頼することであると言うのです。

ダビデは詩篇62篇でこのように歌っています。5-8節「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。：6 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。：7 私の救いと、私の栄光は、神にかかっている。私の力の岩と避け所は、神のうちにある。：8 民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。セラ」と。8節でダビデは明らかにすべての民に向かって呼びかけています。「神様に信頼しなさい。神様は私たちの避け所だ。」と。でも、それだけではありません。実は、5節はこのように訳すことができます。いや、このように訳すべきだろうと思います。ダビデは実はこう言っているのです。「私のたましいよ。黙ってただ神だけを待ち望め。」と。ダビデは、自分の心、自分のたましいが神に信頼することから離れていこうとするときに、神がだれなのかを、神がどのような方なのかを知っているから、彼は自分のたましいに向かって呼びかけるのです。自分のたましいに向かって教えるのです。「たましいよ！黙ってただ神だけに信頼しなさい。」と。皆さん知っていますか？皆さんは自分のたましいに向かって叫びますか？「黙っていなさい！」、いろんな感情が私たちの心を満たして、神からの信頼を奪っていこうとするときに、皆さんはみことばの真理に立って「たましいよ！」と言いますか？「ただ黙って神だけに信頼しなさい。」と言いつづけますか？そして、それをするが故に、周りの人たちに向かって「どんな時にも神に信頼しなさい」と勧めていますか？神を信頼することができる、それは大きな助けです。それは私たちの人生に豊かな希望を備える土台です。神が確かに私たちの避け所であるということを私たちが理解するならば、私たちは常にこのように言うことができます。「神様は良い方で、神様は良いことを成す方だから、例え、何が起こったとしても最終的に私がたどり着く所は良い所でしかあり得ない。」

と。なぜなら、神は裏切らないではないですか、神は見捨てないではないですか？悪いこと、苦しいこと、悲しいこと、困難なことが私たちの人生にやって来るときに、また、私たちが予期もしていなかった痛みや悲しみが私たちを覆うときに、私たちは心を尽くして主に拠り頼まなければいけないのです。拠り頼むべきなのです。なぜなら、私たちは神が良い方であることを知っているからです。神が愛ある方であることを知っているし、神があわれみ深く恵み深い方であることを知っているからです。この方は裏切ることのない誠実な方であり、この方は私たちのためにご自分の御子をささげてくださいました方です。私たちは真実なるこの神に、自分たちの希望の錨を下ろさなければいけません。私たちは自分たちの持っている心の確信に沿って生きないといけません。神はどんな方ですか？良い方で、神は良いことを成す方なのです。

私たちの人生にどんなことが起こったとしても、例えば、それが大地震であったとしても、例えば、それが私たちの心が折れるような様々な出来事であったとしても、それが何であったとしても、神が良い方であり、神が良いことを成すというその真実を変えることはないのです。だから、私たちは心を尽くして神に信頼することができるのです。それが神を信頼することです。完全な確信をもって神を信頼するのです。

## 2. 神だけに依存する 5b節

二番目にソロモンが私たちに言うことは5節の後半です。「自分の悟りにたよるな。」ここでソロモンが言っていることは、神に信頼するということは、神以外の何ものにも拠り頼まないということです。私たちはもうすでに神がどんな方なのかを知っているのです。今何度も言いましたが、神が良い方であることをよく知っています。神が良いことを成すこともよく知っているし、神が愛に溢れ、恵みに溢れ、私たちをあわれみ、私たちに最善を成してください方であることを、私たちはよく聞いて知っているのです。でもなぜ、それなのに私たちは神に信頼することを怠るのでしょうか？なぜ、私たちは神になかなか信頼を置くことがないのでしょうか？ソロモンはその理由をここで教えているのです。

それは、私たちは神以外のものに身を委ねていることです。「自分の悟りに頼るな」、この「頼る」ということばは、丁度、骨折した人が松葉杖に自分の体重を掛けている、その姿を連想させます。実際に使われているヘブライ語のことばはそのような形で用いられるのです。自分の体重を杖に傾けている、その杖に頼っているのです。簡単に想像できますね。このことばは私たちが肉体的にも霊的にも、私たちの体重を私たちの存在を、だれか、もしくは何かに依存している状態を表わしているのです。そして、ソロモンは言うのです。「依存してはいけません」と、何に依存してはいけないのですか？「自分の悟りに依存するな」と言うのです。

ソロモンはここで私たちに「自分たちの人生を、自分自身の理解や発見や、自分自身の直感や感情に依存してはいけません。」と言うのです。そのようにするならば、それは神を信頼することではないと言います。「悟り」のすべてが悪い訳ではありません。私たちは理解をするべきです。私たちは悟りを持つべきです。知恵を蓄えてより賢くなっていくべきです。でも、ここで言っている「悟り」というのは、私たちが勝手に自分たちの中でそれが正しいと感じていたり、考えていたり、思い込んでいることです。神の知識とは離れた所で、それとは別の所で持っている様々な知識、様々な悟りです。私たちは一般的な常識と言われるものを持っています。例えば、大阪で車を運転しているなら、自分の方の信号が青になったからと何も考えずにすぐに飛び出してはいけないことを知っています。なぜなら、赤になっても車は2台位飛び出して来るからです。それは私たちが人生の経験をもって、大阪で運転をする時は気を付けなければいけないということを知っているからです。悟りです。でも、ここで言っているのは、そのことではなくて、私たちが生きていく中で、様々な知恵や感情に基づいて「これは正しい」と思っていることにすべてを依存してはいけないということです。どのように変えないといけないのか？神が言っている真理に基づいて、私たちは自分たちの悟りをしっかりとチェックしなければいけないのです。

ソロモンは言いました。「知恵の初めは神を恐れること」です。神を恐れることが知識の初めだったのです。神がどのような方であるのかを知り、神が何を求めているのかを知り、神が定めている真理が何かを知って、それに基づいて物事を理解していかなければいけないのですが、私たちが普段していることはそうではありません。私たちは神の知恵に基づかずに、自分たちの悟りに頼って生きることが多くあるのです。皆さん、聖書的な事実、聖書的な現実「神は良い方である」ということです。また、聖書がみことばを通して教えている神の特徴はすべて真実であるということ。これが事実です。これが真実です。これが現実です。けれども、私たちがその現実を私たちの理解に反映させないときに、私たちは神に信頼することに失敗するのです。

私たちが神に信頼することをせずに、自分たちの理解に拠り頼む時に、私たちは自分たちが思い込む

ことが真理であるかのように捉えて生きるのです。例えば、皆さんは自分の銀行口座に「0」がたくさん並んでいたら「ああ、安心だ」と思いませんか？十年後も大丈夫だと考えませんか？「0」の数が減っていくと「どうしよう…」と不安になりませんか？例えば、良い大学に入ることが出来たら、良い教育を受けたら自分たちの生涯は成功につながっていくと考えませんか？でも、それに失敗したら私たちは思い悩みませんか？これからどうなるのだろうか？と考えませんか？自分たちの人生の先行きが見えなくなったとき、例えば、社会制度の保障がこれからどうなっていくのだろうかということを考えたときに、先が見えなくなると、私たちは不安を抱きませんか？悪いことが起こって痛みを感じると、私たちは自分たちの生涯に対して、未来に関して疑いを抱き恐れを持ちませんか？

私たちはこのようなことをしているのです。自分の周りに起こっていることをまず見るのです。そして、私たちはそれを見て「こうに違いない」と考えるのです。つまり、「0」が少なかったら未来は危ういと考えます。「0」が多いと私は大丈夫と思うのです。それに基づいて、神についての結論を出すのです。「苦しみが起こりました。悲しみが起こりました。先のことが分かりません。こんな辛いことはありません。神様はなんて酷い方なのでしょう。こんな困難があります。この困難を乗り越えることは私には絶対にできません。だから、神様は私を助けることは出来ません。」と。私たちはそのようにして生きるときに、やるべきことと全く反対のことをしていることに気付かなければいけないのです。私たちは自分たちの前に起こっている現実を見て物事を判断し、神に対する結論を出すのではなく、私たちはまず最初に神を見て、神が言っている真実は何かを元に、今起こっている現実を解釈しなければいけないのです。

皆さん、私たちは多くの時に自分の悟りに頼ります。神のことを抜きにして、自分の理解に基づいて物事を判断しようとします。神の真理にそれを照らし合わせないのです。皆さん、よく考えてみてください。皆さんは自分の人生に起こっている状況がどういうことなのかを、神よりも正しく知っていますか？どうですか？皆さんは、皆さんにとって何が最善なのかを神よりもよく知っていますか？皆さんは、現在の状況がどのようになっていくのかを、神よりもご存じですか？もう一つ加えるなら、皆さんは自分にとって本当に最善なことを知っていますか？私たちは余りにも多くの時に、神に対して条件付きの信頼をします。神が自分の思っている通りのことをしてくださる限りは、「あなたを信頼します」と言います。ところが、自分の思っていること、自分が考えている最善とは違うことを神が為さるときは、「ああ、やっぱり神様は信頼し難いな。」と思うのです。だから、困難なことがあると、辛いことがあると、苦しいことがあると、自分の思うようなことがたくさん起こって来ると、神に対する信頼を失って、神のみことばに基づいて物事を解釈することを止めて、自分の悟りに頼るのです。

私たちはまるで幼い子どもたちのようです。「何食べたい？」、「アイスクリーム」。それが夜のデザートだけだったらいいのです。ところが、朝「何食べたい？」と聞いても「アイスクリーム」、お昼は？「アイスクリーム」、夜は？「アイスクリーム」、なぜ、そのように願うのでしょうか？子どもたちにとって自分の最善はアイスクリームだと思うからです。親はだから毎食、主食としてアイスクリームをあげるのでしょうか？あり得ないですね。親は子どもにとって何が最善であるかを知っているからです。子どもたちは親に向かって「私にとって勉強が最善です。」とはなかなか言いません。子どもたちは「勉強は要りません！」と言います。「学校に行くなんて止めて家でずっと遊んでいたいのです」と言っても、親は「いや、それはいかん」と言います。「勉強することは必要だ。遊ぶことも大切かもしれないけれど、勉強することは必要だ。」と言って学ばせるのです。親は子どもにとって何が最善なのかを知っているからです。私たちはいつも神に向かって言うのです。「アイスクリームください。私はアイスクリームでないといやです。」と、神の前で私たちはまるでデパートで寝転がって泣き叫んでいる子どものようにだだをこねるのです。「自分の思う通りでないといやだ」と、その姿は信頼しているのでしょうか？

私たちの人生で自分の思い通りにならないことはたくさんあります。自分の考えていないことが起こることがたくさんあるではないですか？そのときに皆さんはそれに対してどのように応答しますか？自分の悟りに頼って、神の真理を抜きにしてそのことを理解しようとしますか？それなら、そこに待っているのは絶望でしょう。悲しみでしょう。それ以外に見出すことは出来ません。なぜなら、神がそこにいないからです。でも、そのような状況の中で、私たちが神の真理に沿ってそれらをしっかりと解釈するときには私たちは、なぜ神は私にアイスクリームを与えてくれないのか分からないけれども、神は必要なものを備えてくださっているのだという理解のもとに、主に信頼し、最善が起こることを期待して、希望を持って生きていくことが出来るのです。ソロモンは言います、「自分の悟りに頼るな。」と。神に信頼することは簡単なことではありません。私たちが「簡単だ！」と思うなら大間違いです。

皆さん、思いませんか？苦しいときに、もし、神が横にいてくれて「大丈夫だよ」と耳元でささやいてくれて、私たちの肩を叩いてくれて、抱きかかえてくれて、その胸の中で休ませてくれて、それを感じることが出来れば神を信頼することが出来ますと私たちは思うのです。なぜなら、私たちは肉体的な実際的な安らぎが欲しいと思うからです。それがあつたら神に信頼することが出来ると思うけれども、でも、神は見えない方なのです。触ることが出来ないのです。でも、皆さん知っていましたか？私たちが触ることが出来るものよりも、聞くことが出来るものよりも遥かに確かな形で、神は苦しみのあるときに私たちの横にいてくださるし、喜びのあるときにも私たちの横にいてくださるのです。聖書はそのように言います。また、私たちが思っている時間通りに、計画通りに神が物事を進めてくださるなら、忍耐のしようもあるかもしれないけれども、神に信頼することが出来るかもしれないけれども、神は私たちのスケジュール通りに動いてくれないのです。

アブラハムを見てください。75歳のときに、彼は神からサラを通して子どもが与えられると神から約束されました。アブラハムは信仰に満ちた人だったから神を信頼して生きたのですが、でも、彼の計画通りに子どもが生まれなかったのです。彼は待たなければいけなかったのです。神の計画に沿って生きることを学ばないといけなかったのです。でも、残念ながらアブラハムは失敗しましたね。なぜですか？待たなければいけない期間が長かったからです。だから、アブラハムは、時には、私の財産を受け継ぐのは私のしもべだと言い、時には、ハガルを通してイシュマエルを設けたのです。皆さん、アブラハムはイサクが生まれるまで24年待ちました。24時間ならアブラハムは神を正しく待ち望むことに苦労はしなかったでしょう。75歳の日に神がやって来て、その御告げをしたその次の日に確かにサラが身ごもっていたら、「神様はなんとすばらしい方でしょう」と言ってその場で終わっていたでしょう。でも、アブラハムは待つことを学ばなければいけなかったのです。25年間、百歳になるまでです。

信頼することは難しいですね！皆さん、私たちはいろんなときに、世間の常識であるとか、私たちが感じる事が正しいと思う事柄に基づいて物事を判断しようとしています。でも、神が要求していることは、私たちが自分たちの知識に頼って判断をすることではなく、神の真理に基づいて正しくすべてを理解することなのです。皆さん、何に寄りかかっていますか？いろんな出来事が起こるときに、皆さんは何に寄りかかっていますか？身を置いている杖は自分の悟りですか？それとも、神の真理に基づいた正しい知識に拠り頼んでいますか？ソロモンは言います。「神に信頼するという事は、私たちが神に完全な確信を持つことであり、私たちが神以外の何ものにも拠り頼まないこと」と。

### 3. 神を知ること 6a節

6節に「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。」とあります。「認める」ということばに注目してください。皆さん、「認める」と聞いてどのようなことを想像しますか？ある翻訳ではこのことばを「覚える」と訳しています。私はずっと思っていたことは、いろんな所に行ってどこに出て行ったとしても「ああ、ここにも神様がいらっしゃる。あそこも神様がいらっしゃる。」と考えることでした。どうですか、皆さん？皆さんはもっと賢いので私よりも遥かに深く理解されていたかもしれませんが、私がこの箇所を学んで初めて気付いたことは、この「認めよ」ということばは、実は、「知る」ということばです。そして、それこそがソロモンが三番目に言う「私たちが神を信頼する」ということの意味なのです。「神を信頼するという事は神を知ること」なのです。

単に、理知的に知るということではないことは皆さん想像できるでしょう。実は、この「知る」と訳されていることばは、例えば、創世記4章1節で使われています。そこでは「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、…」とあります。アダムがエバを知って子どもが生まれるということなのです。ここで言わんとしていることは「親密な、これ以上ない近い知識」のことです。このことばは詩篇139篇で、神が私たち一人ひとりが立つのも座るのも、どこにいるのも全部ご存じだということをして使われています。つまり、ソロモンがここで言っていることは、私たちがどの道を進んでいようとも、どこへ進んでいようとも、ありとあらゆる所で、神を親密に、ものすごく近く知らなければいけないということです。皆さん、ありとあらゆる所で神を知っていますか？皆さん、どのようにして神を知ることが出来るのですか？どのようにして神を知りますか？私たちが生きている経験上で知って行くのですか？違いますね！

神がご自分を現わされている場所はどこですか？それはご自身が語られたこのみことばではありませんか？神はこの神が与えてくださった聖書という啓示を通して、ご自分がどのような方なのか、何を求め、何を願っておられるのかを私たちにはっきりと教えてくださっているのです。「ありとあらゆる道において、私たちがどこにいようとも、何をしようとも、どこに向かって進んでいようとも、私たちは神を知ること、それが主を信頼することなのだ。」とソロモンは言うのです。

皆さん、私たちは心に神のみことばが刻まれていないといけないのです。いろんな事柄が人生に起こるではないですか。どのようにしてそれを正しく判断するのですか？神を知っていなければ判断することが出来ないのです。だから、私たちはみことばに身を潜めていないといけないのです。みことばを思い巡らしていなければいけないのです。皆さんといっしょにもう、詩篇119篇を見て来ました。著者は何と言いつけて来ましたか？119：68「あなたはいつくしみ深くあられ、いつくしみを施されます。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。」、いろいろな問題が起こるたびに、苦しみがあるたびに、彼が願い求めたことは一つでした。「主よ、どうぞ悟らせてください。教えてください。あなたのみことばを知らせてください。」と、なぜなら、それこそが神を信頼していく道だからです。それこそが問題の中にあって勝利をして行くことが出来る方法だからです。神のみことば以外に神を知ることは出来ません。神のみことば以外の場所で、私たちは正しく神を理解することは出来ないのです。だから、私たちはこのみことばを学び、このみことばを理解し、このみことばを注意深く知っていけないといけないのです。頭の中だけでなく、それを心から知るので。私たちがどんな場所によいとも、どんな人生の季節に置かれていようとも、私たちのすべてにおいて、私たちは神への身近な知識を蓄え続けなければいけないのです。

皆さん、神を知ること、神を信頼することは、私たちがしてもしなくてもいいどうでもいいことではないのです。それは私たちが最もしなければいけないことなのです。私たちが何よりもしなければいけない神からの召しなのです。私たちがより良く神を知れば知る程、私たちはより良く神を信頼します。神をより良く信頼すればする程、私たちは益々神を知りたいと心から願うようになります。愛する皆さん、皆さんは神を知っておられますか？皆さんはどんな状況においても完全に疑うことなく神を信頼することが出来ると言うことが出来るだけの知識を持っておられますか？それが神を信頼するという事なのです。

## B. なぜ、神を信頼することが良いのか？ 6b節

最後に、私たちはなぜ神を信頼することが良いことなのかを考えないといけません。ソロモンはそのことを確かに教えてくれています。ソロモンはきっとこのように言うことが出来ました。「神を信頼するのは神が神だからですよ。」と。それで良かったのです。でも、ソロモンは私たちに、神がソロモンを通して私たちに神に信頼することがどうしてこれほど素晴らしいことなのかを教えてください。それを知るから私たちは益々神に信頼したいと思うことが出来るようになるのです。ソロモンはこのように言います。「**そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。**」と。何が素晴らしいのでしょうか？素晴らしいのは、私たちがまっすぐにされた道を歩むことが出来るということです。

二つのことばに注目していただきたいのですが、

### 1. 「まっすぐにする」

まず、一つは「まっすぐにする」ということばです。このことばは、ここに訳されているように「曲がりくねったものをまっすぐにする」という意味もあれば、また別の訳をすると「滑らかにする」という意味があります。どちらにしても言っていることは同じです。私たちが神に正しく信頼を置いて生きていくなら、そうすれば、それが曲がりくねっていたとしてもでこぼこであったとしても、神が私たちの道をまっすぐにし滑らかにしてくださるということです。このように聞くと皆さんは「なんと素晴らしいことでしょう。神を信頼するなら私たちが困っているいろんな問題が取り除かれるのでしょうか。」と考えるかもしれません。「じゃー、益々神様を信頼しましょう。」と安直に考えるのですが、その前に少し待ってください。

皆さんは今まできっと神に信頼して来られたと思います。でも、神は皆さんが抱えている問題をすべて取り除いてはくさいませんでした。時に、確かに神は、病の中にいるときその病を取り除いてくださいます。時に、神は困難な人間関係の中で思い悩み苦しんでいるときに、その人間関係の解消を、解決を与えてくださいます。時に、大きな経済的な問題が与えられたときに、神はそこに恵みを与えてくださってその経済的問題を取り除いてくださいます。でも、どうですか？私たちの周りでも神を信頼していると思われる方たちが、病の中で苦しみを続けていませんか？私たちの周りでも、神に信頼を置いていらっしゃる方々が人間関係の問題で思い悩んでいることを知っています。経済的な状況が改善されない中に置かれていることも知っています。違いますか？神は嘘を言っているのでしょうか？真っ直ぐではないではないですか？滑らかではないではないですか？いつまで経ってもデコボコしているではないですか？

皆さん、パウロは神に信頼を置いていたと思いますか？私はパウロは私たちよりも遥かに神に信頼を置いていたと思います。でも、覚えておられますか？Ⅱコリント12章で、パウロは自分に与えられていた「とげ」について「取り除いてください」と神に願い求めました。別の言い方をすると、「神様、

どうぞ、私の行く道を滑らかにしてください。」と言っているのです。答えはどうでしたか？「取り除きましょう」でしたか？「分かった、あなたはわたしに信頼しているから、あなたの問題を取り除いてあげましょう。」と、神はそうのように言われましたか？違いますね。「それを取り除かない、そこに置き続ける」と言ったのです。「あなたの行く道はデコボコし続けています」と言われたのです。それだけを見ると、私たちはきっと「神様は酷いことをするな、信頼しているのにどうしてデコボコのままなのですか？だから信頼できないのです。」と考えるかもしれません。でも、よく考えてみるなら、何が起こったのか皆さんよくご存じですね。神は「あなたの弱さにあって、わたしはあなたに恵みを与えてあなたを強くする。」と言われたのです。

皆さん、神が道を滑らかにするとき、時に、神は私たちの進んでいく道のデコボコを平らにしてくださいます。障害物を取り除いてくれて、私たちが真っすぐに進むことが出来るようにしてくれます。また時に、神は私たちが生きていくデコボコの道をそのままにして、その代わりに、私たちがそのデコボコの道であったとしても、しっかりと歩みを進めていくことが出来るように、私たちを強めてくれることもあるのです。例え、大きな障害物があったとしても、それを私たちが神の力によって助けられて、それを取り除き真っすぐに進んでいくことが出来るようにしてくれるのです。どちらにしても、私たちの行く道は滑らかになっていませんか？私たちが行く道は真っすぐではありませんか？

## 2. 「道」

二つのことばに注目してくださいと言いました、もう一つは「道」と訳されていることばです。このことばは、私たちが通る一つひとつの人生の道筋を表わすというよりも、むしろ、私たちがどんな状態でその道を歩んで行くのか、そのことに焦点を当てていることばです。この6節の前半部分で「**あなたの行く所どこにおいても、**」と記されていますが、ここは実際には原文では「すべての道で」と書かれています。この「道」と、6節の後半部分の「道」は違うことばなのです。強調していることが違うのです。「あなたが行く所どこにおいても、すべての道で主を認めよ」というのは、あなたが歩んで行く人生の道一つひとつを言っています。後半の「**そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。**」というその「道」は、私たちがどのような状態でそこを通って行くのかに焦点が当てられているのです。

神は私たちの行く道を真っすぐにしてくれます。私たちがその道を真っすぐに歩んで行くことが出来るようにしてくれます。どんなにデコボコの道であったとしても、私たちがそこを滑らかに通り抜けて行くことが出来るように助けてくれるのです。それが神を信頼する者に神が成してくださるすばらしい祝福です。皆さん、皆さんは神を信頼しておられますか？私たちはいろんな所でつまづきます。いろんな所で人生のデコボコにつまづくのです。障害物が突然現われて思い切り頭をぶつけます。見ていない所からいろんな問題が降って来て、私たちはそれに押しつぶされてしまいます。でも、神を信頼している者たちは、その障害物に満ちた道の中にあつて、デコボコでどうしようもない歩くことが非常に困難な場所にあつても、神によってその障害物を取り除かれ滑らかになるか、もしくは、神によって力を与えられて、それをしっかりと乗り越えて真っすぐに進み続けることが出来るようになると神はおっしゃるのです。

私たちの人生は訳が分からないものです。そんなことはありませんか？何が起きているのかさっぱり分からないと思うことがたくさんあるのです。そのような経験を私たちはいつもします。私たちの周りで起こること、私たちの人生に起こって来ることは、私たちを混乱させ不安にさせます。けれども、もし、私たちが本当の信頼を神に持っているならば、私たちは常に希望という港に錨を下ろすことが出来るのです。そこから離れることがないのです。どんなに大波が襲ったとしても、どんな強風が私たちを飲み込もうとしても、私たちはそこから離れることがないのです。例え、どんな状況の中に自分自身を見つけたとしても、皆さんは神が皆さんを置こうとしている場所にいることを忘れてはいけません。神は自分が計画していない所に私たちを連れて行くことはないのです。「あなたはあんな所に行ってしまったのか！」と神が天で驚いていることはないのです。

例え、どのような状況があつたとしても、神は皆さんに最善をもたらすためにそのことを成してくださっているのです。例え、周りの状況がどんなものであつたとしても、それらは私たちが神を信頼しない理由にはならないのです。ひよっとすると、皆さんは今、神が皆さんの目に見えない所に、神が私たちから顔を隠しているかのように感じているかもしれません。ひよっとすると、皆さんは神が私たちに立ち向かって、怒りをもって接していると思っておられるかもしれません。けれども、もし、私たちが神のことをより近くより親しく知って行くなれば、私たちは神に確信を持つことが出来ます。なぜなら、神は私たちの永遠のためにご自分の御子を十字架に掛けて、私たちの贖いのためにいけにえとしてささげたではありませんか？その方は皆さんの最善を今も気遣い、それを起こそうと努めておられます。

私たちは常に、私たちが抱える困難を、信仰の目によって見ないといけません。私たちの感情の目によって見てはいけないのです。

丁度、福音が福音のメッセージが聞くことによって与えられるように、救いの信仰というものが福音のメッセージを聞くことによって与えられるように、神への信頼という信仰は神のみことばを通して困難の中で生まれて来るものなのです。皆さんは神を信頼しておられますか？皆さんはどんな状況の中にあっても、神が良い方であることを知っているが故に希望を持ち続けてください。ソロモンは言いました。「心を尽くして主に信頼しなさい。自分の悟りに頼ってはいけません。すべての道において主を知りなさい。そうすれば、神はあなたの行く道を滑らかにしてくださる。」と。

確かに、今日、この日の記憶は多くの人たちの中に鮮明に残っています。様々な特集を見て涙することを多くの皆さんが経験されたことでしょう。確かに、そこには痛みがあります。確かに、そこには恐れがあります。確かに、そこには苦しみがあります。それを感じます。けれども、その記憶が鮮明であるのと同じように、いや、それ以上に、神のみことばは私たちのうちに鮮明なものです。神の愛や神の心遣い、神の良さというのは、私たちのうちに鮮明なものでなければいけないのです。

神を信頼しましょう！神に希望を持ちましょう！滑らかな道をいっしょに進んで行きましょう！！